
明晰夢

じえっと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明晰夢

【Nコード】

N9545H

【作者名】

じえつと

【あらすじ】

中山はその日の前日、残業でベッドに倒れこんだのは午前3時、目が覚めると見渡す限り草原のと真ん中にいた。ここは一体……。夢と現実の世界で起きた不思議な物語。

第一話 目覚め（前書き）

残酷な描写まではいかないですが、血などそれっぽい話は出てきますので、それが大丈夫な方でしたら読んでいただければ幸いです。それと、想像は好きですが、頭はあまり良くないので文章とか変だったりすることもあります。

第一話 目覚め

僕はその日、全てを受け入れた。

目を覚ますとそこにはいつも寝ているベッドではなく、
森林などがまったくない草原にいた。

「どこ・・・だ？」

中山あきよしは広告代理店に勤め、前日には山ほどの資料と格闘して、

ベッドに倒れたのは午前3時の事だった

戸惑いながらもここが何処なのか、
なぜここにいいのかを考えていた。

ダメだ...、思い出せない。

まったく分からない恐怖と混乱が渦巻く中、なぜか中山は冷静であった。

「懐かしい・・・？」

そうここには一度来たことがあるような気がする。

いや、来たことがある！

どうしてこんな所にいるのかはまだ分からないにしろ、
ここが何処なのか徐徐に思い出し始めている。

「誰？」

後ろから声が聞こえて中山は振り向き身を構えた。

小学生低学年ぐらいの少女が目の前にいる。

最初は戸惑ってしまったが、何か知っているかもしれない
という考えが働き返答した。

「僕は中山あきよしっていうんだ、キミは？」

「わたし、名前が思い出せないの……」

少女は目をそらし、うつむいてそう答えた。

（この子、記憶がないのか？）

「じゃあどうしてここにいるの？ここに住んでるのかな？」

「私にも分からないの、なぜここにいるのか、目が覚めたらこの野原にいたの・・・」

少女は今にも泣き出しそうな顔で答えた

（この子も自分と同じなのか・・・）

あきよしは何かヒントが手に入ると思い。別の事を聞いた。

「他に誰がいなかった？」

すると、少女は先ほどまでとは違い中山の目を見て答えた。

「一人いたわ。中山さんと同じぐらいの歳の男の人！」

「その男性は今どこに？」

「名前が知りたくて聞こうとしたら、何かずいぶん焦って東の方に走って行ってしまったわ、『ここはもうヤバイ』って何度もつぶやきながら」

「ここはもうヤバイ？ってどういう事だ？」

「わたしも分からないの。名前は『とがり』って言うてたわ」

とがり？

とがりなんて名前はいくらでもいる。

しかし、何か引っかかる。

ダメだこのままでは前に進まない誰かこの場所が分かる人を探さなくては…、

「俺はここがどこなのか調べるために少し探索してくるよ。
その『とがり』って奴が、ここはヤバイって言うてる以上危険か

もしないしね。」

「キミは？」

少女は考えることなく

「わたしも行きたい！一緒に行けば何か分かるかもしれないし、中山さん怖い人じゃなさそうだからね。」

少し考えたが「わかったそれじゃあ行こう！けど名前がないと流石に困るな…、」

あきよしは少し考え、

「『ゆい』って名前はどうか？名前が分かるまで『ゆい』って呼んじゃあダメかな？」

『ゆい』という名前に決めたのにはそこまで理由はなかった。自然とその名前が思い浮かんでいた。

「『ゆい』？いい名前！」

少女はプレゼントを貰ったかのように喜び、はしゃいだ。

（よっぽど気に入ってくれたんだな）

あきよしは少女の振る舞いを見て安堵の笑みを浮かべた。

そして二人はここが何処なのか探す旅に出た。

第一話 目覚め（後書き）

見てくれた人、三級！！

第二話 血文字（前書き）

ある日突然あきよしは目が覚めると草原にいた。

ここはどこなんだ？

いったいどうしてオレはここにいるんだ？

全てが謎に包まれる中、一人の少女と出会う。

名前はゆい。

それはオレがつけた名前。

名前も思い出せない少女と旅が始まる。

第二話 血文字

もう何時間歩いたのであろうか。

．．、

．．、

同じ景色をずっと歩いてる様な気がする。

「ゆい」という記憶がない少女とこの不思議な野原を探索しようとして歩いているの

だが、だだっ広い野原を、あきよしの視界一面に広がる。

「ゆい、疲れたか？」

流石に子どもだから疲れてると思いゆいに気を使つと、

「わたしは平気、なぜだか疲れないの」

確かに…

自分も何時間歩いているのに関わらず息一つ上がらない。

体力には少し自信はあるが流石におかしい…

そんな事よりも何かここが分かる建物とかないのか…

途方に暮れていると

先程までは何もなかったのに気がつくやと遠くの方に銅像らしき物が見える。

「何かあるよ!」

ゆいも気付いたのか何かの手がかりがあったと思いハシャイでいる。

「とりあえず行ってみよう。」

二人は若干駆け足でその銅像らしき物へと向かって行った。

近くに寄ってみると、銅像ではなく、巨大な岩にまだ塗り立ての赤い文字がつづつてある。

「バクノ

キモチヲ

ジブンノバシヨデ

ツカエ

ソシタラナラバ

ナガイタビハ

オワル」

ん？

な．．、なんだこれは…、

一体誰が書いたんだ？

バク？

キモチ？

ジブンノバシヨ？

タビガオワル…

いまいち分からない。とりあえず手がかりには代わりがない。

何かメモれる物は…、

そういえば、ポケットにちょっとした違和感が…

自分のポケットに手を突っ込む。

「携帯…」

思わぬ物が出てきた。

前までは携帯なんかポケットに入っていなかった…

気味が悪い…

しかし、自分の携帯であることは間違いない。

（電波は…やっぱり圏外か…）

とりあえず携帯のカメラで岩の文字を撮ろう
撮り終わって他を探索しようとしたらゆいが、

「このペンキなんか変」

ペンキ？

確かに普通のペンキならもっと濃いはず、薄くでもしたのか…

と思いあきよしはペンキらしい物を触り確かめる。

（いや違う！これは…血だ！）

「血だ…」

思わず口に出てしまいハッとしたが既に遅く、ゆいの顔が青ざめていた。

何故だか分からない、血で書いた事なんてないのに分かってしまった。

しばらく沈黙が続き、ゆいが先に口を開いた。

「ここはもうやだ…、早く他の場所へ行きましょ」

少女には重すぎる、自分でもかなり気分が悪くなる。

「そつだね、ごめん」

なんとなく謝り他の場所へ行こうとすると

「岩の後ろに扉があるよ！」

ゆいが驚きながらあきよしに指を指しながら教えた。

扉…

洞窟へとつながっているのか？

流石に先ほどの血文字を見る限り危険は考えた方がいい。

でもなぜだかこの場所が何なのか？どうして自分がここにいるのか
が知りたいと

いう衝動に刈られ、足が勝手に進み、扉のノブに手を掛けていた。

鍵はかかってなさそうだ。

「帰らなくていいの？」

扉を開けようとした時、突然、ゆいがあきよしに話しかけた。

（いきなり何なんだ？俺はここが何なのか確かめたい。）

「懐かしい…と言えはいいのかな？ここは1回、いや、2、3回来たことがあるんだ。でも何故か思い出せないんだ。あと少しなんだ。あと少しで思い出せるんだ。」

と、あきよしはゆいに思いを伝えた。

「そう…、分かったわ。行きましょ！」

ゆいもようやく行く気が出たみたいだ。

でも、なんかさっきのゆいは感じが違った。なんかこう、別の人み
たいな感じだ
った。

（なんだろう？

「急に帰らなくていいの？」なんて言い出してくるなんて。流石に
怖いのかな？

）

なにか引つ掛かりながらも行きたい気持ちがり、その理不尽な会
話を考えずに
再度ドアノブに手を掛け扉を開けた。

今思えばどうしてあの時あの話の意味を考えなかったのだろう。

空はより一層雲に多いかぶさった。

第二話 血文字（後書き）

見てくれた人、産休！！！！

第三話 遊園地（前書き）

ここはいつたいどこなんだ？

記憶のない少女「ゆい」

岩に書かれた赤い文字

それは血で書かれていた

バク？

これはいつたい何を意味するのか・・・

第三話 遊園地

扉の向こう側、そこには自分とゆいがいた。

「鏡？」

ゆいはなぜこんな所に？と、不思議な顔をして鏡を見つめた。

あきよしも呆気にとられていた。

（何なんだこれは？鏡…、他に何かないのか？）

鏡の周りを調べたが何も出てこなかった。

「岩の文字以外情報なしか…」

と、あきよしは落胆し、鏡を叩こうとした瞬間叩こうとした手が鏡を通り抜けた。

！！

二人は何が起こったのか分からず棒立ちしていた。

「…、ハ、ハハハ！ここまでくると何でもありだな！」

あきよしは冷静を装おうとしたが、混乱しているため声が震えていた。

ゆいも同じだ、鏡から写るゆいの体が震えていた。

「まるで夢の中みたいだ。」

自分で言っただけと我にかえった。

（夢？）

あきよしは考えた。

（しかし夢が自分の思考がこんなに働くものなのか？）

あきよしはもう一つ気になってた事を思い出した。

あの血文字確か…。

『バク』

バクと言えば夢を食べると言われている伝説の生物と言われている。

何かそれと関係があるのか？

もしくはこれ全てが夢なのか？

（夢ならば…）

「ゆい！この鏡の中へ行ってみよう！怖いなら少し待っていてくれ。確かめてくる。」

あきよしは半信半疑であるがここが夢だと仮説した。

「どうしても行くの？怖いよ…」

無理もない、血文字、すり抜ける鏡、現実だったらまず起こらない事だらけだ。

ゆいは明らかに動揺を隠せずにいた。

少し考えた末、

「けど一人はやだ！わたしも行く！」

仮説を立てたが、その仮説が当たっているとはまだはつきりしていない。

むしろ当たらないで欲しかった。

しかし、こんな所まで行って夢オチはごめんだ。

ただ行ってみたい。

ただ確かめてみたい、この先に何があるのか？前の場所との関係があるのか…。

行くキツカケが1つでも欲しかった。

そう、仮説でも何でもよかった。

1人で行く事はできた。

しかし、あきよしもこの不思議な現象が続けば精神的におかしくな
ってしまいそうだった。

たとえ少女だろうが誰かがいるだけで心強い。

ある意味強引な誘い方ではあったが、ゆいも行く事になった。

勇気を出し一步鏡の中に踏み入れる。

まるで水の壁を通り抜ける感覚だった。

顔が鏡を通り抜け、あきよしのマブタが開いた先には遊園地があっ
た。

ジェットコースター、観覧車、メリーゴーランド、数々のアトラク
ション機具が動いていた。

どこの遊園地なのか分からない。

ここは初めて来る場所だった。

「うわー！遊園地！」

後から入ってきたゆいはなぜ遊園地にたどり着いたかなど考えず、

遊園地があるという事が何より嬉しかったのかハシャイでいる。

しかし、あきよしは別だった。

人がいない…

ジェットコースター、メリーゴーランド、他の遊具に誰も乗っていない。

そう、誰1人も…。

しかも勝手に動いている。

ゆいも最初はハシャイでいたがあきよしと同様、違和感に気づき、あきよしの服を少しつかみ周りを警戒した。

（遊具が動いている？なら誰か1人はこの機械を動かしている者がいてもおかしくない。）

先ほどの血文字を書いた人か？

もしくは他の『誰か』なのか？

あきよしが頭の中のファイルを整理している途中にメリーゴーラン

ドの辺りに気配を感じた。

（誰かがいる！）

一瞬にして凍りついた空気へと一変した。

ゆいも気付いたらしい。

あきよしの背中に隠れ、メリーゴーランドの方を覗いた。

誰かには会いたかった。

情報？

ここは何処なのか？

山ほど聞きたい。

しかし、今は違う。

あの血文字を見てしまった後では…、

鼻の奥に刺激が走る。この感覚は昔、車に引かれそうになった時に
味わった感覚。

自分の意識ではなく、体全身が警戒しているかの様だった。

あきよしは気配だけで恐怖したのは初めてだった。

ゆいも全身の震えがつかんだら服から伝わってきた…。

ハア

ハア

ハア

ハア！

心拍数が上がる

「誰だ!!」

応答はなく遊具の音だけが響きわたる。

（気…のせいなのか？）

しかし、服の振動で、まだゆいが震えている事が分かった。

確かめないと…、

ゆいがずっと怯えたままだ。

あきよしは意を決してメリーゴーランドの方へと歩み出そうとした瞬間、
背後から足音が聞こえた。

メリーゴーランドの方ばっか気を取られていた。

服の振動が一段と早くなる。

それにつられ、あきよしの心拍数もまた格段とはね上がる。

ゆいを守るようにかばいながら後ろを振り向いた。

そこにはスーツ姿の男性が立っていた。

（人間…）

もうその次元の考えしかできなかった。

第三話 遊園地（後書き）

読んでくれた人山九！

第四話 かみや（前書き）

鏡。

現実の世界であればそれは見たものを写し出す道具。

しかし、ここでは違う。

鏡に映し出されたのは遊園地だった。

そこである一人と出会った。

第四話 かみや

先ほどとは違い心拍数が徐々に落ち着いてきている

見た目から歳は同じ位に見えた。

もしもの事を考えあきよしはとつさに構え何か起きた時にと、武器みたいなのがないかと辺りを探した。

その動作を見たスーツ姿の男性は、

「驚かせてすまなかった！俺は怪しい者ではない！
ってそんな風に言ったら怪しいか…すまない。」

その言葉がキツカケだった。

あきよしは直感した。この男性は敵ではない。むしろ同じさまよい人。

しかし、安心しきる訳ではない。

様子を探ることにした。

「キミはここにずっといるのか？」

「ああ、もう3ヶ月はこの世界にいるよ。
しかし、ここは時間がハッキリしない。

遊園地の時計を見て計算したらもう3ヶ月と4日目だ。」

スーツの男性は笑いながら答えた。

（そんなにいるのか？それならここには詳しいはず…）

「飯とかは…他の人とかに会ったりは…ここは一体何なんだ！！」

あきよしは抑えていた気持ちが破裂し、声を荒げた。

「落ち着いてくれ。そんな気になるのは分かる大体の人がそうなるからな。」

「すまない。急にこの世界を自分よりも知っている人がいたからつい……」

「まずは自己紹介からでも、俺は『かみや』って言うんだ。」

（かみや？）

なんだろう。

またも違和感を感じた。

「名前は？」

あきよしは名字ではなく名前が知りたかった。

「すまない。下は何故か思い出せないんだ。
他の人たちも名字だけは覚えていて名前は思い出せないと言っていたよ。」

(思い出せない?じゃあ俺は…)

「君は?」

(名前は伏せておこう)

「俺は中山だ。隣の子はゆいつて言うんだ。」

かみやはあきよしの名前を聞いた瞬間、明らかに表情が変わった。しかし、一瞬だったためあまり気にはならなかった。

「ゆい?名前があるのか?」

わざと話をそらすようにかみやは聞いてきた。

「中山さんが付けてくれたの!」

ゆいは嬉しそうに声を上げた。

ゆいも『かみや』が危険じゃないと判断したらしい。

あきよしはかみやに今までの事を話し、疑問を問いかけた。

「3ヶ月一体何があったか教えてくれないか？」

かみやは少し考えた後、

「話せる所までならいいよ。しかし質問をしてくれないか？
大丈夫のと大丈夫じゃないのがあるからね。」

（何を言っているんだ？話せない事…？）

あきよしは少し疑問に思いながらも一つづつ聞く事にした。

「こっちに来てお腹が減らないんだ、そして疲れもしない。一体これは…」

「原因は分からないが、この世界は不思議だね、
何も食べなくても大丈夫なんだ、それどころか寝なくてもいい。疲れないんだ。」

!!

あきよしとゆいは顔を合わせた。

1つの疑問が解けた。どうやらここは体力的な問題はないらしい。

まだなぜ大丈夫かは分からないがそう言ってくれるだけであきよし達は楽になった。

「どうやって来たんだ？」

「多分、中山君と同じだと思うよ。気がついたらこの遊園地にいたんだ。」

あきよしは少し落胆した。

だが、まだ聞きたい事は山ほどある。

別の質問に切り替えた。

「他の人って何人ぐらい会ってるんだ？」

「君を含めて5人かなみんなまた違う世界に行ってしまった…。」

この質問になると少しかみやは悲しい顔で言った。

それとは別にあきよしは『かみや』の言う「世界」というキーワードが気になっていた。

（先に本題に移るか…）

「ここは一体何なんだ。どうして俺たちはここにいるんだ？」

遂に、遂に聞く事ができる。

しかし、返答は意外な返しだった。

「それは答えられない。」

「は？」

思わず声が出てしまった。

「どうしてだ？俺はそれが知りたいんだ！」

「すまない。」

かみやは目線を下の方に向けた。

あきよしは、なぜかみやが話せないかに苛立っていた。

「血文字は？この遊園地は？この通り抜ける鏡は？」

かみやはうつむいたままであった。

「中山さん……怖い……」

ゆいの一言であきよしは我に返った。

「すまない……」

あきよしは謝ったがまだ納得はしていなかった。

「こちらこそすまない。しかし分かってくれ。これ以上は危ういんだ。」

（危うい？誰かに監視でもされているのか？）

「誰かがこの現状を見ているとでも？」

「すまない。」

かみやは未だに下を向いたままであった。

あきよしはそれでも食い下がった。

「頼む、知りたいんだ！まだ話してなかったが俺は名前を知っている。」

それはこの世界では何か関係はあるのか？」

あきよしの話を聞き、かみやは硬直した。

その時のかみやの顔は喜・怒・哀・楽・疑・迷・狂、全てを顔から伺えた。

あきよしはかみやのこの顔にどういう決意が込められていたのかは知るよしもなかった。

第四話 かみや（後書き）

読んでくれた人3級！

第五話 現実（前書き）

僕とゆいの前に現れた男性、
かみや。

僕よりも長くここでさまよっているらしい。

いろんな情報を聞こうとするが何かを隠している。
いったい何なんだ？

そこで自分は名前を知っていると言ったら、
かみやは硬直した。

これにはいったいどういう意味があるのか・・・。

第五話 現実

「本…当…なのか？」

「ああ」

「じゃあ君は…！！」

（なぜそんなに驚いているんだ？ゆいの時にはそんな素振りはないか
ったのに…）

あきよしは自分の名前を言おうとした時、かみやが先に話始めた

「そうか…、なら話は別だ。急がないと、
ここも、もう『危ない』な…」

とがりと言つ男と同じ事を言っている。

「すまないが話す前に1つお願いがあるんだが聞いてくれないか？」

「内容によるが…」

かみやはうなずき話始めた

「元の世界に『とやま』と言う女性がいるんだがその女性に戻れなくて

本当に申し訳ないと伝えてくれないかい？幸せだったと…。」

「自分で伝えればもっと喜ぶんじゃない？」

それを聞いてかみやは少し苦笑いをした。

「分かったよ。でも出来る限り自分でそついう事は言って欲しいがね」

久しぶりに笑った。

（かみやなら心強い仲間になれそうだと
あきよしはこの話が終わったら一緒にいこうと考えていた。

そう考えている内にかみやは話始めた。

「今から僕が話せる所までこの世界の現実を教えるよ。」

「あと、これだけは先に言っておくよ、今から起きる現実には、君のせいじゃない。」

「あ、ああ……」

（何を言ってるんだ？）

疑問に思っ間も与えずかみやは話始めた。

「この世界は夢と現実の狭間にある。なぜここに居るのは自分も分からないんだ。」

ただ、自分が行きたかった場所がこの世界に生まれるんだ。

自分は、とやまといつか遊園地に行きたかった。

だから、目が覚めたら遊園地にいた。

だから中山君も目が覚めた場所は自分が望んで呼び出した場所なん

だ。」

「あの場所が望んでいた場所？」

疑問を口にしたが、

かみやはまるで聞いてなかったのよに急いでまた話始めた。

「そしてその世界は一度だけではなく何回が行っているはずだ。

あ、

僕は現実にも一回、夢で2回ここに来たことがある。

あ、

だからまずその世界が何なのか？を思い出すんだ。

あつ、

自分の世界は何もないと思うが情報は必ずある。

あつ、

一度戻って確認した方がいい。

あつ、

なるべく早く

あつ、

あつ、

ー

所々、かみやは嘔吐の前兆みたいな動作を「あつ、」と声を出しながら我慢していた。

（な…何だ？　様子が…変だ！）

あきよしは不気味、いや、恐怖すら感じた。しかし、かみやはひたすら話した。

何かを急かし、怯えるように…

「急いでくれ！

あつ、

あつ、

この世界には『バク』がいる！

あつ、

あつ、

そいつが自分の場所を食べに来たらもう

あつ、

この世界から出れなく あつ、 なる！

あつ、

それまでに

あつ、

血文字を探せ！

あつ、

あれは

あつ！

真実だけが

あつ！

書かれている！

あっ！」

かみやの視点が合わなくなりはじめた。

「それと…

あっ！

気をつける…

あっ！」

そう言っつて、先ほどまで視点が合わなかったかみやの目の標準があきよしの顔からゆい目線に移した。

あきよしはどういう意味なのかを聞こうと…

「どういう意…」

[illegible]

かみや白目になり発狂すると同時に突如かみやはポケットからナイフを取り出した！

(こっちに襲ってくる！)

あきよしはゆいをかばいながら身を構えた。

しかし、

それは、

違った…

ナイフをかみや自らの腹部に刺したのだ。

何度も何度も…、

狂った様に叫び、笑いながら…

.. バタツ .. と後ろで音がし、ゆいは氣を失った。

あきよしは止めようとしたが、目の前の現実には体が恐怖し、動かなかった…、

そしてかみやは狂った様にそのおびただしく流れ出す血を、自分の手で地面に文字を書き始めた。

ミタメニダマサレルナ

ミタメニダマサレルナ

バクハオノレノココロデヘンカスル

オノレノガオノレヲミツメナオセ

サスレバ

バクノキモチサズカラン

文字を書き終わると同時にかみやは倒れた。

かみやは痙攣していたが、徐々に動かなくなっていくた。

口だけが動いた。

「あつ…きー…、………」

な…

ん
…

で
…

俺のあだ名を…

…痙攣が治まった

その代わり、もうかみやは動く事はなかった

ただあきよしを見ながら…

第五話 現実（後書き）

読んでくれた人参球！

第六話 葛藤（前書き）

なんなんだこれは？

夢？なのか？

そんな非現実を目の当たりにしたあきよしは、
ただ、立ち尽くすしかなかった。

第六話 葛藤

あれからどのくらい経っただろうか、

かみやが自害してから気がつくところにあつた無惨な姿がなくなっていた。

ただあの血文字だけが…

疲れを知らない世界。

今になって睡眠という活動がどれだけ体だけでなく心を癒してくれるのか…、

「気を失うか…」

横で目を閉じ小さな吐息をしているゆいの隣であきよしはつぶやいた。

それからしばらくただかみやの悲惨な映像をあきよしの思考とは別に繰り返し繰り返し呪われように思い返していた。

「う…ん…」

ゆいが目を覚ました。

ゆいは静まり返った遊園地に一体何が起きたのか解らずにいた。

「大丈夫？」

「うん。けどなんで私は気を失ってるの？あれ？かみやさんは？」

（さっきの記憶がない？）

「……………何か調べたい事があると言って先に他の場所へ行ってしまったよ。」

「そっか、あの人いい人だったのね。」

「…」

あきよしは嘘をついた。

あの映像をこの少女に伝えなければならぬのか、この子にはまだ早すぎる。

「これからどうするの？」

「そうだな、彼と別れる前に色々と情報をもらったんだ。まずはそれを整理するよ。」

そう、かみやはあれが起きる前に色々な情報を教えてくれた。

自分の命と引き換えに。

「まずは自分がいた場所に戻ろう！」

そう無駄にはしない。

疑問は腐るほどある。

しかし、自分の為に命を犠牲にした人の言霊を疑いたくはなかった。

《自分のいた場所に戻った方がいい。必ず情報がある。》

確かに何も知らずに前いた場所にいるのといないとは全然違う。

（しかし、戻って何を…）

あきよしはそう思いすぐに頭を振った。

（まずは行ってみよう。）

まだ最初にいた場所の「懐かしい」という感覚にも答えが出ていない。

（それに…血文字も探さないと…）

あきよしは血文字を探したいが、それが見つかればあの光景がフラッシュバックしてしまう可能性があり半ばトラウマになりかけていた。

あきよしは立ち上がり血文字が付いた床に向かって一礼し、鏡の場所に向かった。

「
…」

「…さん」

「…な…さ…ん」

「なかやまさん！」

はっ、とゆいの声が聞こえてきた。

「ごめん、ぼーっとしてたよ。」

「なかやまさんなんか変だよ」

ゆいは少しムツとしながらも少しでも雰囲気を良くしようとしていた。

あきよしはまだ引きずっていた。

今度またあの光景を見たら自分は正常なままでいられるのか？

ゆいが見たら…、

それだけが頭の中でかき回っていた。

（まずは元の場所に…）

「なかやまさん！」

今度はゆいが有り余る声を振り絞り叫んだ。

「ど、どうした？」

「あれ！」

ゆいは指を指した。

その指の先には鏡が…

人がいる！

確かに人がいる、しかし、走って鏡の中に入ろうとしていた。

その瞬間、メリーゴーランドに気配があつた事を思い出した。

「待て！待ってくれ！」

あきよしは大声でその人に呼び掛けた。

しかし、振り向きもせず鏡の中に吸い込まれる様に入って行った。

「なかやまさん行きましよ！」

あきよしは少し驚いた。

確かに急いで後を追うのがいいが、こんな状況なら普通、少しは構えるはずだ。

だが、ゆいの気迫にのまれただうなずき、鏡の前まで走って行った。

鏡…

相変わらず不気味な雰囲気を漂わせている。

「さあ、行きましよ」「ゆいは行く気だ。

「少し待ってくれ。まずアイツはどこにいたんだ？」

それを聞いて少し苛立つゆいが返答した。

「彼、多分この前話した『とがり』さんよ」

！！

「後ろ姿だったから曖昧だけど、分かるの。」

「あの人ならこの世界を知ってるんじゃないかしら？」

確かに、しかし、またあの光景があきよしの目の前に映し出された。

（またあんな事が…）あきよしはもうトラウマになっていた。

「でも…」

なぜ弱気になっているか解らないゆいは、苛立ちを隠せないでいた。

「とうしてそんなに弱気なの？
あの場所が知りたいんじゃないの！？
私は自分が誰なのか知りたい！」

そうだ。

俺も知りたい。

だけど…

「…、」

「もう私だけでも行く！どうしたのかわからないけどなかやまさん変だよ！」

そう言い放ち、ゆいは鏡の中に入って行った。

あきよしは少し考え腹を決めた。

（まずはゆいが心配だ。）

「ゆい待ってくれ！」

勇気を出し鏡の中へと入って行った。

「ここは…学…校？」

目に映ったのは、野原ではなく、中学校らしき建物が見えた。

第六話 葛藤（後書き）

あつ、えくと、サンキュ！

第七話 学校（前書き）

あの惨劇を目の当たりにした中山は心の中にある恐怖に犯されていた。

それを知らないゆいは苛立ちを隠せずに鏡の向こうへと先に行ってしまった。

追いかける中山。

たどり着いたのは学校であった。

第七話 学校

「どうして？」

「野原に着くんじゃ…」

あきよしは混乱していた。

そしてすぐにゆいの事を思い出した。

「ゆい…！」

返事がない。

（ここにはいないのか？あの鏡はランダムに行く場所を決めているんじゃ…）

そしてもう一つ重大な事に気がついた。

「ここは…知ってる。」

はつきりと分かる場所に来てしまった。

中学校。

運動場、体育館、どれも一致している。

ただ違和感があるとするなら、校外は何もない真っ白い空間になっていた。

（なんで自分が知っている場所に…）

薄々感じている事は、ここで誰かに出会っなら知り合いの可能性が

高いと言っ事。

『かみや』が言っていた。

《その人が望んでいる場所が作り出される》

ここを作り出したのは誰なのか？

同年代とは限らない。けど、仲のいい人なら協力できるはず。

しかし…

協力…

協力したカミヤは…

…

…、

「ちて」

あきよしは校舎へと向かった。

前の遊園地と違いここの地形は頭にインプットされている。

（まずは、ここに何か手掛かりがないかを調べないと、あと、ゆいもまだいるかもしれない。）

ガチャ

「ドアは開いているか…」

「ゆい…！」

返事はなくあきよしの声がこえました。

知ってる場所とはいえ、ゆいがないだけでこれほど心細くなるとは思わなかった。

「また会ったら謝らなきゃな…」

いつの間にか1年3組にいた。

（昔から変わっていない…）

もう何年前になるのだろうか、でもそれが昨日の様に思える。

「ここには何もないな…」

「みんなどうしてるんだろうっ？」

「みんなにこんな話を話しても誰も信じてはくれないだろうな」

あきよしは言葉に出しながら少し懐かしい気分浸っていた。

「ここも何もないか。」

2年、3年の教室を調べたが何もなかった。

（けど、3年の教室は昔の場所と違うな。俺の教室は別館だったしな。）

あきよしは当時そうだった3年9組の教室に向かった。

ガチャガチャ

（開かない。）

本館から別館に行く通りだけ鍵がかかっていた。

おかしい…

なんでここだけ鍵がかかっているんだろうか…

疑問に思いながらも職員室に鍵を探しに行った。

人の気配が全くない。

遊園地にはあれだけ乗り物の音がしながらも2、3度気配を感じた。

この中学校にはこれだこ静かなのに足音、それだけでなく何も音がなく気配がない。

風すらないな…

職員室について鍵を探したが見当たらなかった。

「しょうがない。壊すか。」

扉の窓を割れば入れるがあまり乗り気ではなかった。

だがこんな所で立ち止まっていられない。

近くの教室からイスを持ち出し扉へと向かった。

！

音がした。

微かな音。

…、

（あの扉の奥！）

急いで窓を割り扉を開けた。

「な…なんだ…これ…」

別館とのつなぐ渡り廊下に足を踏み入れた瞬間、
今までいた中学校とは一変しも、重い、重い、
生暖かい空気が奥の扉から感じる。

誰かがいる。

だが間違いなく『危険』が待っているのはこの空気からひしひしと
感じる。

しかし、前に進まなくては…

あきよしはうなずき別館へつながる扉のドアノブへ手をかけた。

開けようとした瞬間

「開けるな!!」

後ろから大きな声が聞こえた。

急に声がし、あきよしは振り向くと同時に開けてしまった。

男性…

第一印象は腕っぷしがある男

(こいつがこの中学校を…)

「お前は誰だ！」

あきよしは名前を聞こうとしたら先に質問をされた。

「俺はなかやま、君は？」

一瞬男性は硬直したがすぐに話始めた。

「俺は『たかつ』
いつここに来たんだ？ちょっと前まで俺と《アイツ》しかいなかったのに」

（アイツ？）

「俺は1時間前にここに着いたんだ。所でゆいって女の子見かけなかった？」

たかつは少し考え

「いや、見ていない。それよりそこから離れるんだ！」

急に大声を上げた。

なんで？と言おうしたが、たかつの目が本当に危ない、『危険』を物語っていた。

あきよしは、従い扉から離れた。

「なぜあの扉を開けてはいけないんだ？」

少し落ち着きあきよしがたかつに質問した。

「中に《アイツ》がいるんだ。アイツが…」

「アイツ？」

第七話 学校（後書き）

ありがとう

第八話 アイツ（前書き）

ゆいを追いかけたあきよしに着いた先は学校だった。

「ここは知っている」

なんとあきよしの母校であった。

そこで知り合った男性『たかつ』

アイツって・・・？

第八話 アイツ

「アイツって？」

あきよしは誰なのが気になっていた。

扉に鍵をかけ、あの重い空気、そしてたかつの目…。

「『ふじた』っていう男らしい。」

『ふじた』に『たかつ』…

この世界には何人いるんだ。

「知り合いなのか？」

たかつは首を横にふりながら

「いや、ここで出会った、俺は砂浜にいたんだが変な鏡を見つけてここに着いたんだ。」

「お前は？」

「俺は遊園地に、そして自分がいた草原に行こうとしたらここに着いたんだ。」

「ふじたはここで出会い、自分たちがなんでここにいるのかを一緒に探していたんだ。でも…、」

たかつはつらい表情で言葉を詰まらせた。

「もう少しだけ待ってはくれないか？今ふじたに会ったらアイツは必ず…死ぬ。」

「死ぬ？」

「ケガでもおっているのか？」

「いや、ケガはしていない。俺が一度気絶させるために負わせた傷ぐらいかな」

あきよしはイマイチ内容が掴めなかった。

「ケンカ？もしくは誰かいたのか？」

「……」

「なんて説明すれば分かるのかな？
この世界ではむやみに話すのは危険だ。
少し考えさせてくれ。」

たかつはそう言ってしばし考え始めた。

（しかし気になるな…）

状況を把握できていないあきよしにとって歯がゆい事にはかわりない。

しかし、勝手に行って最悪な状況を作り出しても困る。

（たかつもこの事を《この世界》って言ってたな）

あきよしは少なからずたかつは自分よりここに長くいると感じていた。

「もう長くここにはいるのか？」

あきよしは知りたかった。

「ああ、どのぐらいいるかは分からないが、一月はいるんじゃないかな。

ここはカレンダーとかないし、日にちをカウントしていないしな。」

たかつは少し恥ずかしそうに答えた。

敵意は全く感じられない。

最初の怒鳴りから少し構えていたが、もう緊張はなくなっていた。

「いつふじたに会えるんだ？」

あきよしはふじたに興味を持ち始めていた。

たぶん敵ではない。

なら三人で協力して…、

…

…

ダメだ。

またアレが脳裏に浮かんできた。

「血文字って知ってるか？」

あきよしは《血文字》を聞いて硬直した。

「……」

「ああ。」

少し間をあけあきよしは返答した。

「アレがどうやって出来るかも知っているのか？」

「……ああ、」

心臓の鼓動が尋常ではないぐらい加速する。

「そうか……」

たかつは悲しい表情を浮かべながらうなずいた。

「ならふじたに会う資格があるな。」

「どついつ事だ？まさか死んでるんじゃない？」

「俺が言えるのはここまでだ。
あとは直接確認してくれ。」

何かは分からない。

しかし、惨劇に近い事が起きるのはその話から目に見えている。

「もしかして、アレがトラウマか？」

たかつは確信をついてきた。

「お前はどつなんだ？あんなの見たら誰でも…」

あきよしは隠そうとして反論した。

「ああ、俺はアレを見て発狂し、自我が保てなくなりそうな所までなつてたよ。

そついう意味でもふじたに会わせたい。」

たかつは静かに答えてくれた。

いったいふじたに何が起きているんだろうか…。

「ふじたに会ってみるよ。」

あきよしはたかつの言葉で覚悟を決めた。

そしてたかつに連れられ扉の奥へと向かった。

紐で手首を縛られている男性が目の前にいる…。

「これは…？」

目の前にいるのがふじただとは直ぐに分かったが、この状況には全く理解が出来なかった。

「うあああ!!!!」

突然ふじたが叫び出した。

手首が縛られているため、動けないが気が狂った様に叫んでいる。

「大丈夫……」

「近づくな!!」

あきよしが近寄ろうとした瞬間、たかつが叫んだ。

「なぜだ！あれだけ苦しそうにしているのに！」

「ダメだ。」

あきよしはたかつに怒りすら感じているのにも関わらず、たかつは冷静だった。

「せめて縄だけでも…」

「ダメだ。」

たかつの返答は同じだった。

しびれを切らしたあきよしは、たかつを無視し、ふじたに近寄り縄に手をかけた。

「縄をほどけばふじたは自殺するぞ!」

その時、たかつから思いがけない答えが返ってきた。

あきよしは手を止め、たかつの目を見た。

（たかつは何を考えているんだ？

ふじたはこんなにもツラそうなのに…、

ツライ？

たかつは死ぬと言っていた…

…

…

まさか…！）

「まさか…、血文字を書く前兆の…」

たかつは無言のままうなずいた。

覚えがある。

この狂った感じ。

そう、かみやも血文字を書く手前に今のふじたの様に発狂し、自我を保てなくなっていた。

そして…、

「俺は一度アレを見てトラウマになりそして2度目に気が狂いそうになり3度目

、ふじたの時に何とかして死なせない様にといい気絶させて自分で死なないよう

に手首を縄で縛ったんだ。」

そうだったのか…

アレを2回も…

あきよしはようやくこの中で起きている事を把握した。

「どのくらいこの状態なんだ？」

「もう1週間は経つかな。

この世界はお腹が減らない…

だから縛っていても大丈夫。

だけど治す方法が見当たらない…、」

あきよしはたかつを見て相当、精神的な疲れがあると感じた。

2度の惨劇を目撃し、ふじただけは生きてはいるが、ほぼ見殺しの状態と変わらない。

かといってあきよしにもこの状況の打開策はない…。

二人は叫び声の中で立ち尽くした。

第八話 アイツ（後書き）

まいど！

第九話 疑心（前書き）

3年9組

そこにはこの世界を創り出した張本人が横たわっていた。
そう、

アレの寸前で……。

どうすれば……。

第九話 疑心

ふじたには申し訳ないが、一度、この場所から離れた。

アレは治せるのか？

たかつは医療に関しては全く分からない、もちろんあきよしも知らない。

「こんなに死にたがり、発狂して血文字を書く病気なんかどこの医者も分かるわけないな…」

たかつは開き直ったように言い放った。

たかつは自分で出来ることは一通りした、あきよしがい付いた事は全てやっていた。

「後は時間だけが解決してくれるしか俺は分からない。」

あきよしはただたかつの言葉を聞くことしか出来なかった。

歯がゆい…。

しかしどうすることも出来ない。

《急がないと》

急にかみやの言葉を思い出した。

そうだ、

ここで立ち止まってはられない。

「情報交換しないか？」

あきよしは他の糸口を見つけるため話題を変えた。

「知らないのか？」

たかつは不思議に思いながら返答した。

「何が？」

あきよしは全く意味が分からなかった。

「血文字ができる、人が発狂し、
自殺するのはこの世界で起きた自分だけの情報を他人に教えるとな
ってしまっんだ。」

！！

知らなかった…

…

…

…

なら、かみやは…！

「それは違う！」

たかつの言葉に我に返った。

「俺もそれを聞いたとき、死んでいった人たちは俺が殺したんだと思っていた。

でも違うんだ、託したんだよ。

なかやまの死んでいった人はよろしく頼むと言ってなかったか？」

！

言っていた…

《とやまに申し訳ないと伝えてくれないか？》

しかしアレは自分が名前を教えたら…

って事はたかつにも名前が…！

「たかつは名前は覚えてるのか？」

「あ、ああ。」

少し曖昧な返事をした。

「俺は知っている。ここを出れる資格がある人間。」

資格？

この世界から？

出れる？

「で…出れるのか？」

あきよしは動揺を隠せずにいた。

「出れる！俺は選ばれた人間！」

たかつはその時、雰囲気が変わった。
今までたかつとは別人に見えた。

「なんで解ったんだ？」

「…、何となく…、
その死んだ人からそんな事を聞いたんだ。」

嘘をついた。

2度目の嘘。

今回は前のゆいとは違い少し疑いがある嘘だった。

たかつは何かを隠している…

まだこれははつきりとはしていないが、何かが引っ掛かる。

あきよしの本能がそうさせたのか、
これまでの勘が嘘をつくという指示を出した。

「そうか…、」

たかつはあきよしの反応を見て元のたかつに戻った感じがした。

（伺っている？）

あきよしはそう感じた、しかし今は最初に会った時の『たかつ』に戻っていた。

「思ったんだが、学校内をもう一度調べてみないか？
ふじたはこの世界で目が覚めたと言っていた。
ならここにアレを治す方法があるんじゃないか？」

確かに。

むやみに他の場所に行ってゆいを追いかけた時みたく他の場所に行
ってしまったら元も子もない。

しかしさっきのたかつの態度…、

信頼していいのか？

まだはつきり解らないがこれも何かの企みを…

いや、今はダメだ。

疑っているのは全てを疑ってしまう。

今は「疑」より「信」を優先だ。

確かにたかつは嘘を言っていない。

少しの事ならば大丈夫。

深い自分自身の事を話すとアレが起きてしまう。

その境界線が解れば…

その為にも協力…。

「俺も調べるよ。

この学校…！

たかつはここの卒業生とかか？」

忘れていた事を思い出した。

あきよしはずっと会う人、聞く人の名字に違和感を感じていた。

もしかしたらみんな知り合いなのでは？

そう考え始めたのもかみやの言葉だ。

なぜ俺の昔のあだ名を…。

『かみや』珍しくない、『とがり』も珍しくない、たかつはあまり聞かないがあきよしはどこかで聞いた感じがしていた。

「思い出せない…。
すまん。」

でもふじたはさすがにここの卒業生なんじゃないかな？」

そう、ふじたは絶対にここの卒業生だ。

じゃなきゃなぜこの世界を作ったんだ？

「なかやまもここの卒業生なのか？」

「ああ、しかしふじたは知り合いじゃないと思う。」

「思う？」

顔を見ても思い出さないのか？」

「ああ、見た感じ同年代ぐらいに見えるのだが思い出せない。」

しかし、なぜ思い出せないんだ…、

謎はまだまだ多すぎる。

「そう言えばふじたの叫び声がなくなったな…」

さっきまで本校まで聞こえてた叫び。

聞かないフリをしていたがたかつと話していたらいつの間にか聞こえなくなっていた。

「30分ぐらいで治まるんだ。なぜか人を見るとアレがおきるんだ。」

たかつはあまり言いたくない感じではあったが教えてくれた。

再び静かな空間が広がった。

「しかしどこを探せば……
たかつはまだ調べてない場所はあるのか？」

「ああ、…一つだけ」

その返答からして何となくあきよしは察した。

「ふじたの今いる教室は調べる前にふじたがアレになってしまい……、
あの中で5分もいたら今度こそ狂ってしまいそうだ……」

たかつは震えていた。

まだたかつもアレが克服したわけではなかった……

「……俺が行って調べてくるよ」

たかつはあきよしを見ず軽くうなずくだけだった。

「すまない……」

この言葉だけを残して。

第九話 疑心（後書き）

ひゃっほー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9545h/>

明晰夢

2010年10月9日23時44分発行